



国際交流員の活動日誌

vol.61



「植樹祭」 Arbor Day

いくつかの物はこの世から急になくなってしまったら、人間は生きられなくなります。その中の一つは木です！

さまざまな文化には、木の存在を祝ったり敬意を表する習慣がありますが、今回はアメリカの行事、アーバーデー（植樹祭）を紹介します。

1854年にジュリアス・スターリング・モートンという人物が現在のネブラスカ州に引っ越し、荒涼とした平野の風景を寂しく感じ、庭にいろいろな樹木

を植え始めました。ネブラスカ州初の新聞の編集委員であったモートンは、新聞を通して木の知識と生態的な重要さを読者に伝えました。1872年に地域社会も植樹について奨励する提案をし、第1回のアーバーデーではネブラスカ州だけで100万本の木を植え、大成功しました。

現在のアーバーデーは全米で4月の最終金曜日に行われますが、地域によって天気や季節が違うため、植え時は州により異なり、アーバーデーもそれぞれ変わります。

木を大切にする意識といえば日本だと御神木を考えます。もとよりアーバーデーと違って霊的な理由がありますが、木を守る共通点があります。皆で木の大切さを忘れないようにしましょう！（ララ）

地域の魅力 ふる里再発見

都市梁川の発展と歴史 - 4 -

豊臣秀吉の逝去後、豊臣政権を支えてきた五大老内や五奉行の間で確執が深まります。原因は、権限を集め、権威を高める徳川家康に対しての反動であったと考えられています。その後確執が埋まることはなく、不安定な情勢へと向かっていきます。

この流れの中で、家康の動きに対抗姿勢を見せる上杉景勝は、会津神指城の普請を要因に、徳川家康との権力闘争へ巻き込まれていきます。徳川家康は慶長5年（1600）、会津討伐

のため、派兵に踏み切ります。合わせて梁川城も武装化が進んでいきました。

武装化の痕跡を色濃く残すのが北三の丸です。複雑な虎口（出入口）に当時の緊迫した状況と上杉氏の築城技術を読み解くことができます。北三の丸の北辺には現在も水堀が残っています。通称中井戸と呼ばれるこの堀は幅20メートルほどの規模を誇ります。堀に沿って高



梁川城跡北三の丸復元図

さ5メートル以上の土手（土塁）が構築され、東側には虎口が設けられました。虎口の形態は馬出と呼ばれ、内部に兵を忍ばせ、敵軍の動きに合わせて攻撃・撤退が可能出入口でした。馬出の内側には、敵が進軍しにくいつくりの内枳形虎口が併設されています。このような虎口は武田氏が多用したといわれ、武田氏との戦を多く経験した須田氏が梁川城築城時にこの技術を導入したのかもしれませんが。

北三の丸の複雑な構造は関ヶ原合戦へ向かう不穏な空気と、家康と連携した動きを見せる伊達政宗の対応に迫られた上杉氏の緊迫した情勢を物語っています。